校長室だより～燦燦～ №９９５

サイン

2024.3.19

日本は、印鑑、ハンコの社会である。そのため、サインをする機会は少ない。ところが、ここのところ、サインをするようになった。芸能人になったわけではない。書籍を出版した。それを購入してくださった方から、サインをお願いされるのである。最初は、皆さん、私に気を遣って社交辞令で言ってくださっているものと思っていた。ところが、本気だった。

最初は、昔からお世話になっている方からの依頼だった。私にとってのプロバスケットリーグ観戦の指南役である。場所は、飯坂温泉のとある温泉施設だった。一緒に温泉に行ったからである。書籍とサインペンを渡された。ちょうど、机があった。そこに正座した。息を整え、何を書くかを考えた。パッと浮かんできた。

「〇〇〇〇様へ　教育は愛です　教育は人の心が決めます」のようなことを書いた。この書籍を出すきっかけを与えてくれた若手の国語教員には、「〇〇〇〇君へ　教育に愛を！　授業に心を！　いつまでも期待しています」と書いた。毎日、短編小説を書いている本校生徒には、「〇〇〇さんへ　才能を伸ばせ！　自分を信じろ！　自由に生きろ！　そして夢を叶えろ！」と書いた。

結局、毎回、違うことを書いている。依頼者を前に、言葉が湧いてくるから不思議である。サイン慣れしている有名人であれば、書くことを決めているかもしれない。だが、私の場合は、依頼者のことをよくわかっている状況で書くようになる。自ずと、その人をイメージして、その言葉がずっと残ることを考えて書いている。毎回、それなりに緊張する。そのうえ、達筆ではない。字が下手である。ただ、心だけは込めて書いている。

先日は、この４月から教壇に立つ方へのサインとなった。本校職員の娘さんである。この「校長室だより～燦燦～」のファンの方である。まだご本人に会ったことはない。「〇〇〇〇さんへ　教育は愛です　あなたにこれからの教育を委ねます　理想の教師像を追い求めて　あなたらしく努力してください」

思い返すと、自分も書籍にサインをいただいたことがあった。大学の先生だった。サインは書籍とともに、ずっと残る。よく考えると、責任の重い大事な作業である。これからも、書籍にサインをする機会があるかもしれない。その人を前に、どんな言葉が浮かんでくるか、楽しみである。

これからサインをする予定の方がいる。家人である。書籍が出版され、最初にその本をプレゼントした相手である。まだ、サインをしていなかった。果たして、本人を前に言葉が浮かぶのだろうか。心配である。「〇〇〇〇さんへ　この本は　あなたの支えがあって　世に出ました　国語人として　ともに歩んでいきましょう」